

連続講座「国民国家と多文化社会」第6シリーズ

シンポジウム「アジアの中の日本・日本の中のアジア」

山口幸二：連続講座第6シリーズの最終回として、シンポジウム「アジアの中の日本・日本の中のアジア」を開かせていただきます。最初に、本学の国際関係学部教授で言語文化研究所所長でもあります西川長夫先生にお話をお願い致します。本研究はこれまで「国民国家と多文化社会」のシリーズを'94年秋から続けてまいりました。去年の第5シリーズ、今年の第6シリーズ「国民国家とアジアの現在」を中心に、まとめたことを、今後のわれわれの研究方向への提案も含めてお話をいただきたいと思います。それを受けまして、5人の先生方にコメントをいただきたいと思います。では西川先生、よろしくお願いします。

西 川 長 夫

報 告

I はじめに

西川です。よろしくお願いします。司会者の説明にありましたように、去年秋から現在まで「国民国家と多文化社会」の第5、第6の二つのシリーズにわたってアジアの問題を取りあげてきましたが、今回はそのまとめとなっています。どういうことをやってきたのか、資料として二つのシリーズのプログラムを揃えておりますのでご覧下さい。私自身はアジアの専門家ではありませんが、熱心な聴講者ではあったと思います。いずれも興味深いお話で興奮して聴いていたのですが、それを聴きっぱなしにするのではなく、われわれとしてどう受け止めるか、研究所の責任でもあると思いますので、そういう機会を作ろうと、最後に「アジアの中の日本・日本の中のアジア」というシンポジウムを行うことにしました。

(1)「香港返還」の意味—植民地時代の終わり？

つい最近、歴史的な香港返還があつて、私もテレビにかじりついて見ていました。

植民地時代の最後、イギリス側のエリザベス女王代理のチャールズ皇太子の演説は、植民地の時代に与えた害悪については決して触れず、そういう反省なしに、いかに香港を繁栄に導いたかということを話していました。江沢民中華人民共和国の国家首席の方は、アヘン戦争以後の植民地時代がようやく終わる、一つの正義が実現される機会が訪れたという主旨の演説をしていたと思います。

しかし、それを見ていて、私自身は、これは当然感激すべき歴史的瞬間なのに、あまり感激できない、なぜであろうかということをずっと考えていました。確かに植民地時代の終わりを告げる歴史的瞬間ですけども、しかし、あのセレモニーを見ても、前景に出ているのはイギリスの国家であり、中国の国家であって、セレモニーは香港返還の背後にある二つの国家の姿を写し出すことになっている。その一方で、香港の住民にせよ、中国の人民にせよ、ある種の白々しさがのぞいている。もちろん感激して参加している人もあるわけですが。そういうのを見て、植民地時代の終わりにちがいないが、しかし、われわれの中で植民地のイメージが変わってきていることを感じました。同時に、これはひょっとしたらまた一種新たな、形を変えた植民地時代の始まりではないか、という疑問も湧いてきました。

(2) 現状―「東南アジア1997」美術展のカタログから

そういう中で、「国民国家とアジアの現在」を考えてみたいと思います。このシリーズのそれぞれの興味深いお話をどうやってまとめたらいいかと考えたのですが、最初に、美術展の話をしたと思います。皆さんにお配りしている資料に、「東南アジア近代美術の誕生」という美術展の批評が載っていて、その中には「東南アジア1997年―来たるべき美術のために」という展覧会のことも触れられています。その展覧会を見てきた感想からお話したいと思います。

これは非常によくできた美術展で、私はそれを見て初めて、この連続シリーズで話されたことが統一的な、鮮やかなイメージとして私自身の中に結ばれていくことを実感しました。そのうちのいくつかの絵を紹介しながら、そこで出されているさまざまな形象や色彩が、今日これから考えようとしているさまざまな問題を見事に表現していることを、初めにお話したいと思います。理屈だけでなく、美的な感覚の面からもアジアというものを見ておきたいと思うわけです。

まず初めに、美術展のカタログも非常によくできていると思います。美術展は3部に分かれています。その解説の文章もコピーしておきました。「文化の交差点から」「揺れ動く「私」の領域」「社会の中で発言する美術家たち」、それを読んでいただく

と、大体、連続講座のこのシリーズで述べられたことのまとめになるような性質の文章だと思います。その中で特に印象に残った絵について話させていただきます。

「文化の交差点から」という解説の中で、何人かの作家名が記されていますが、その中で強く印象に残った、フレンド・ファハルドという女性の画家の「タロット・カード・シリーズ-フィリピンの女性」があります。主として移民労働者を描いたものです。5つほど作品が出ていますが、タロットカードが描いてあって、移民労働者、ほとんど女性ですが、下に説明の文章が載っている形の絵です。ずっと見ていきますと、かなりトピック的でもあります。2番目に「日本のエンターテイナー」[2]があります。皆さんご存じのように、日本に来て働いている女性たちです。「香港の家政婦」[3]。香港返還で問題になっているメイドさんたち、フィリピンから13, 4万人が香港に行つて出稼ぎをしているわけです。テレビでもその人たちの報道がありました。「登録なし-台湾で」[4]。台湾に出かけている不法労働者。女性が多いわけです。「中東で」[5]。これも暴行事件などがあって、新聞の話題になりました。フィリピンから出稼ぎに行く労働者、女性であるという特殊性があるわけですが、その悲惨な有様を描いています。それぞれが苦しい非人間的な生活を余儀なくされながら、故郷の家に送金をしている女性たちです。



[2] 日本のエンターテイナー



〔3〕 香港の家政婦



〔4〕 登録なし、台湾で



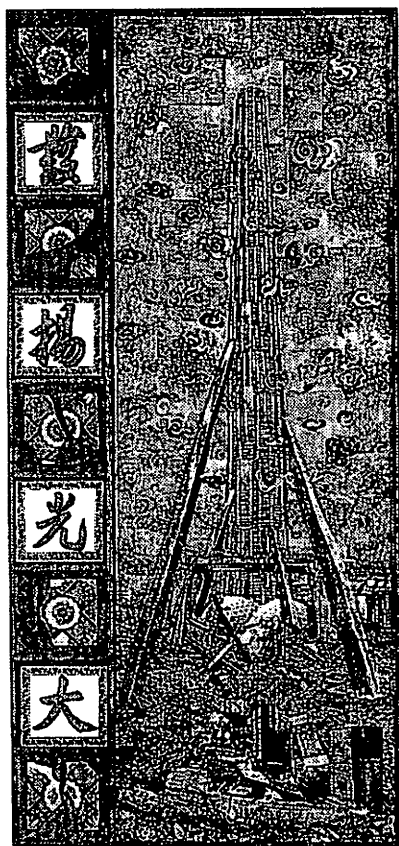
[5] 中 東 で

これを見て一つ感じたことは、かつてアジアを搾取するのは明治以降の日本を別とすれば、白人であり欧米の列強でした。それが今、違った時代になっている。日本であり、香港であり、台湾であり、中東である。そこに一つのアジアにおける交流と構造化された差別が浮かび上がってくるのではないか。絵自体がいい絵で感心して見ていたわけですが、一方でそういうことを感じました。

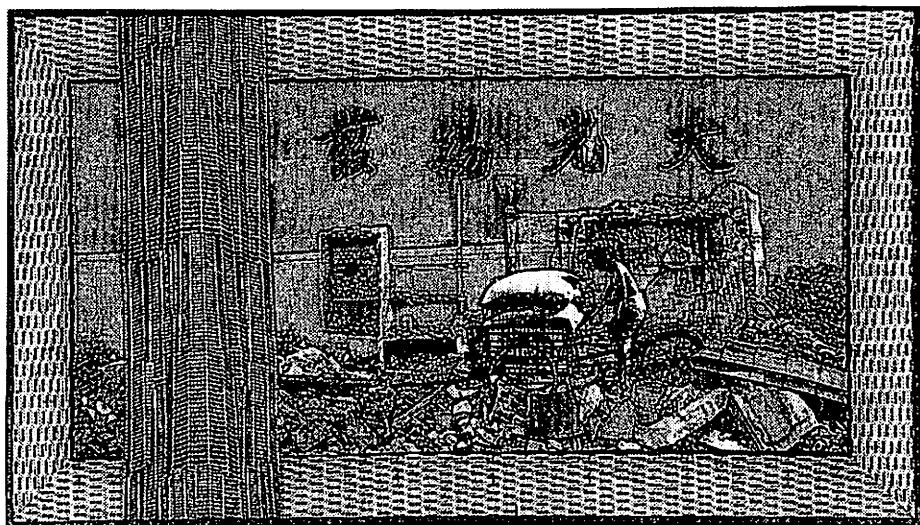
次に、リュウ・クンユウというマレーシアの画家ですが、「お祝いの額Ⅰ」[31]、「お祝いの額Ⅱ」[32]にはマレーシアのペナン島、ジョージタウンに聳える63階のビルが描かれています。都市開発への批判が「お祝いの額」という中国的な形で表現されている。塔の背後には廃墟が描かれています。さらにそれよりも強く印象に残ったのは、同じ画家の「ボンオドリ」[36]です。マレーシア在住の日本人たちが楽しげに盆踊りをしている。それを写真を写した形で描いている。同時に、背後に旧日本軍の兵士たちの残虐な行為があり、過去の亡霊の姿が描かれている。二重写しになっている。文化の交流、交差点というものの中で、その背後にはこういう関係があり、イメージがあるということです。

第2部の「揺れ動く「私」の領域」。さまざまな文化、文明が押し寄せてくる中で、アイデンティティの危機と書いてありますが、単なる危機ではなく、危機の中にある

種の可能性が見出せると思います。代表的な絵としては、アグス・スワゲというインドネシアの画家の「私の部屋」[40]。これは心の中の25ほどの小部屋を開けている。この中にはゴッホのイメージも出てきますし、キリストの最後の晩餐のイメージがあったり、土着の神話的な鳥の姿が出てきたり、さまざまですが、複雑な内面、複合的なアイデンティティのあり様を描き出しています。同じく、「揺れ動く「私」の領域」の中で大変印象的であったのは、ウオン・ホイチョンというマレーシアの人の「移民シリーズ」です。作者自身が移民の中国系、華人です。「マラヤの夢、イギリスの夢」[61]「祖母は14歳で稼ぎ、14人の子どもをもうけた」[62]「ゴム園の労働者と女学生の結婚」[63]「労働者階級の希望」[64]「新しい土地を求めて」[65]という移民シリーズですが、ここにマレーシアやインドネシアなど、東南アジアの姿の一端が描かれているように思いました。



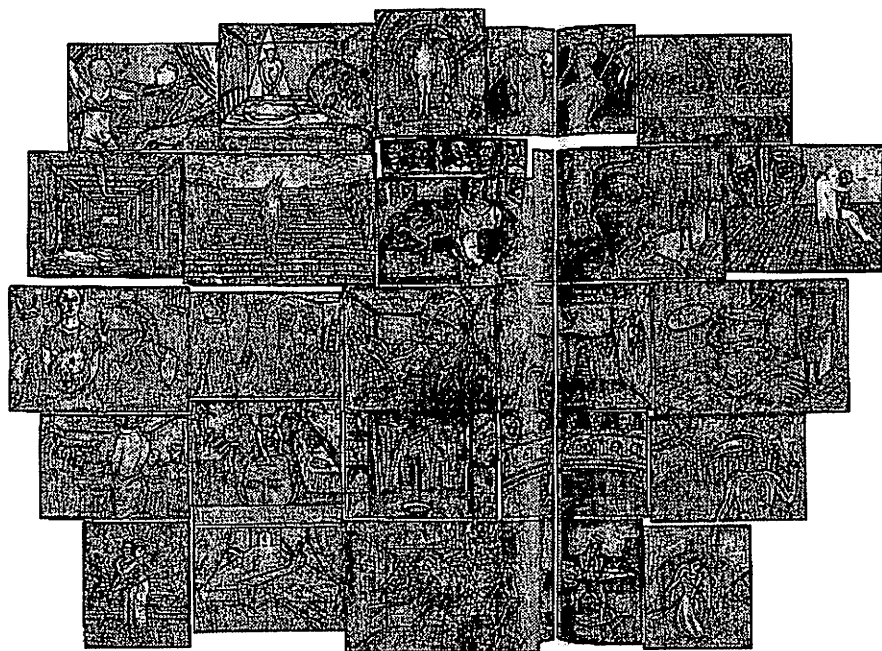
[31] お祝いの額 I



[32] お祝いの額Ⅱ



[36] ボンオドリ



[40] 私の部屋



[61] マラヤの夢、イギリスの夢



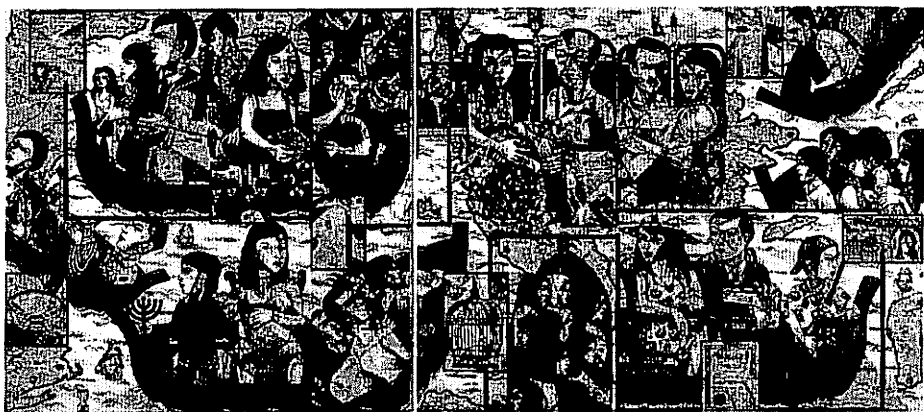
[62] 祖母は14歳で稼ぎ、14人の子どもをもうけた



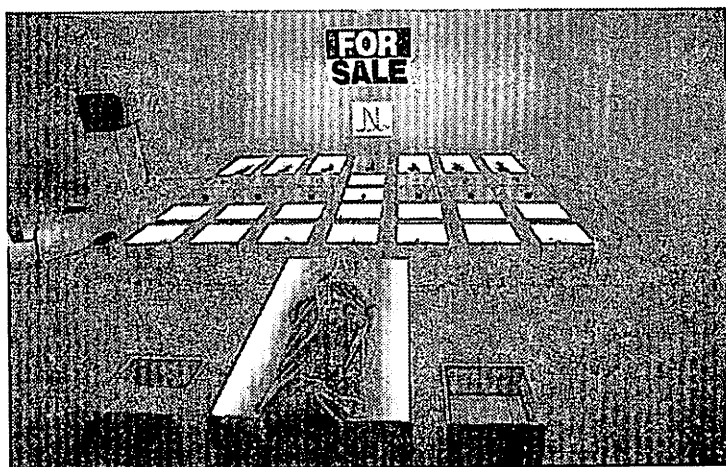
[63] ゴム園の労働者と女学生の結婚



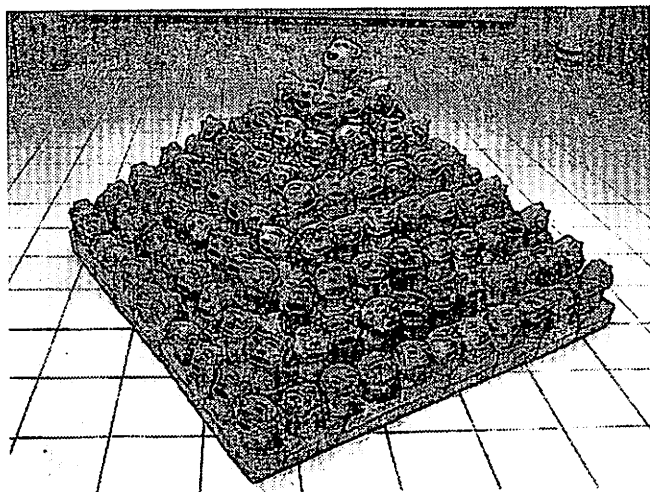
[64] 労働者階級の希望



[65] 遠い土地を求めて



[f] 国家売ります

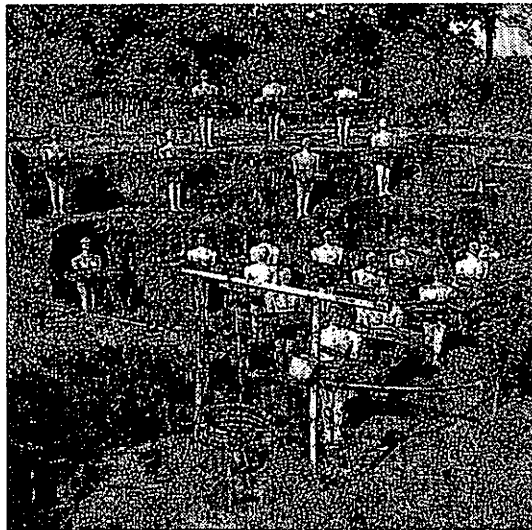


[i] 権力／暴力I

第3部、「社会の中で発言する美術家たち」のところでは、まずアラフマヤーニの「国家売ります」[f]が目を引きます。FOR SALE という文字が奥に赤く写し出されていて、その前に女性が柩のようなものの中に入っていますが、戦車やさまざまな武器のオモチャが箱に入っていて、コカコーラの瓶にコンドームがかけてある。この第3部では、破壊される農村、漁村の農民、漁民たちの姿とか、開発に対するさまざ

まな批判とか出されています。その他、はっきりした言葉にはならないが、大変感動し、心動かされたのが、最後のダダン・グリスタントというインドネシアの人の「証」(あかし) [67] というシリーズです。「権力・暴力Ⅰ」[i] というのはテラコッタの像で頭部をピラミッド状に重ねているわけです。一番頂点にある人物の顔だけが高らかに笑っている。だんだん下にいくほど苦痛の表情が強くなっていく。「証」(あかし) は、レンガとグラスファイバーを混ぜて作った人体の大きな像です。手に自分の脱け殻を持っている。服をグラスファイバーで固めて、10の男と10の女の像が、それぞれ無言で自分の脱け殻を抱いていて、そこに「犠牲」というタイトルがつけられていました。これは連作があって、開発が進む森や草原に置かれたり、海辺に像が置かれたり、本来の住处から追放されて行き場をなくした人たちの像。東京都現代美術館の展示では、この像の足元に「自由に何でも置いて下さい」という文章があって、私が見に行ったのは最後の日でしたが、像の足元に見た人が感想を書いたノートのきれはしを置いたり、カードを置いたり、お金を置いたりしていました。ちょっと見ると、「今まで戦争責任とか言われていたけれど、自分はこの像を見て初めて戦争を実感した。前から見ると明らかに犠牲者だけれども、後ろから見ると、その背中のいかに逞しいことか」などといった感想がノートの端に書かれていました。

そうしたさまざまな東南アジアの作品の中に、私自身はこれまでの連続講座で語られたさまざまなアジアを再体験することができたような気がしました。



[67] 証 (あかし)



1944年頃の日本の勢力圏

(3) アジアとは何か？

アジアとは何か。私自身はアジアという言葉をなるべく使わないようにしているのですが、皆さんのお話を聴いて、それがいかに広大な地域であり、豊かな地域であるかを痛感しました。たとえば、インドネシアの西から東の間がアメリカ大陸の幅に対応するとか。そこには300の民族と250の言語があるとか。多様な民族、多様な言語、多様な生活がある。そこに次々と征服者がやってきて、インドや中国から文明がやってきて、ヨーロッパからポルトガル人が来て、スペイン人が来て、オランダ人が来て、イギリス人が来て、アメリカ人が来て、日本人が来て、またアメリカ人が来てという歴史のなかで形成された多様性です。

アジアとは何かを定義することはできないし、その必要もないと思いますが、広大な多様性の世界ではある。そして今ここで何よりも強調したいのは、それは旧日本帝国の版図に収められていた地域であるということです。ここで地図を見ていただきたいのですが、これは岩波講座『近代日本と植民地』第7巻の「文化の中の植民地」の表紙裏をコピーしてきました。1944年頃の日本の勢力圏とあります。連続講座のこの

シリーズで問題にされてきた地域を全部これは含んでいるわけです。日本帝国の版図に全部含まれている。そのことを忘れないようにしたい。

これは多分に忘れられていた、しかし、これからアジアを考える時に、そのことは忘れてはならないだろう。そのことを強調したいのは、これは旧日本帝国ですが、違った形で新日本帝国が、つまり新たな植民地主義が形成されている、そういう不安や懸念がこの地図を見ながらぬぐいきれないからです。

Ⅱ. 国民国家の普遍性と多様性—アジアから世界の国民国家を考える

(1) 国民国家論の検証

このシリーズは、「国民国家と多文化社会」「国民国家とアジアの現在」「アジアにおける国民国家とエスニシティ」といった表題が示すように、国民国家とは何であるかをアジアと呼ばれる地域で検証してみようという意図がありました。それは現在のアジアの人々の生活を規定する最も大きな要素としての国民国家があるからですが、私たちの研究所では、もう一方で日本の国民国家形成について研究を進めていて、『幕末明治期の国民国家形成と文化変容』（新曜社、1995年）を出しています。730頁の分厚い本ですが、この本は学界にも衝撃を与えたようで、共同研究の成果としては珍しく第二刷が出ていて、いま第三刷を準備中です。

その本の中で、国民国家とは何かということについての一つの説を出しています。お手元の資料に2つの表、表1「国民統合の前提と諸要素」、表2「国民化」が出ています。これは国民国家を定義していく時に、表1にあるような、さまざまな国家装置の形成、この図自体は、フランス革命と明治維新をもとにして作られています、こういうものが普遍的な現象ではないか、という仮説を前提として作られています。今回のシリーズでは、そのことをアジア世界の中で検証していこう、という秘かな意図がありました。さまざまな装置、経済統合のための、国民統合のための、文化統合のための諸装置がどこの国民国家でも作られる。同時にもう一つ、重要なのは、国民形成ということで、国民とはそれ以前の人間とはかなり異なった人間で、国民国家は、国民国家にふさわしい人間を作り出していかなければならない。その両面から見ていこうということがありました。表2に、「国民化」（文明化）と記されていますが、精神や思考の変化は言うまでもなく、感覚的、身体的な変化を伴った、それまでとは全く違った人間をいかに作り出していくのか、というのが国民国家形成の課題です。

「空間の国民化」「時間の国民化」「習俗の国民化」「身体の国民化」。もう一つ、5番に「思考と言語の国民化」というのを付け加えようと思っています。言語が国語というものに、母語が国語に変えられていく。それまでなかった愛国心が強力に埋め込まれていくものとして言語や思考を考えてみたわけです。

そういう意図と図式をもって、アジア・シリーズの9回の講座を聴いていて、われわれが国民国家とは何かということを出してきたテーゼが、アジアの後発の新興諸国の国民国家形成の過程を見ていくことで、見事に検証されていった。いささか我田引水ですが、そういう印象を持っています。

どこの国でも同じような形で、国家装置を必要とし、国民化を必要とする。その基本的な原理は変わらない。しかし、それぞれの歴史的な地理的なあるいは地政学的、地政文化的な状況によって、さまざまなバリエーションが出てくる。

表1 国民統合の前提と諸要素

(1) 交通（コミュニケーション）網、土地制度、租税、貨幣一度量衡の統一、市場……植民地	←経済統合
(2) 憲法、国民議会、（集権的）政府－地方自治体（県）、裁判所、警察－刑務所、軍隊（国民軍、徴兵制）	←国家統合
(3) 戸籍－家族、学校－教会（寺社）、博物館、劇場、政党、新聞（ジャーナリズム）	←国民統合
(4) 国民的さまざまなシンボル、モットー、誓約、国旗、国歌、暦、国語、文学、芸術、建築、修史、地誌編纂	←文化統合
(5) 市民（国家）宗教－祭典（新しい宗教の創出－ミシュレ、伝統の創出－ホブズボウム）	

表2 国民化（文明化）

(1) 空間の国民化－均質化、平準化された明るく清潔な空間／国境 中央（都市）－地方（農村）－海外（植民地）中心と周辺、風景
(2) 時間の国民化－暦（時間の再編）、労働・生活のリズム／神話、歴史
(3) 習俗の国民化－服装、言語、アイサツ、儀式（権威－服従）／新しい伝統
(4) 身体の国民化－五感（味覚、音感、……）、起居、歩行－ 学校、工場、軍隊等々の生活に適應できる身体と感覚／家庭
↓
ナショナリズム
国民の誕生

(2) アジアの国民国家類型

そこで次に、アジアの国民国家類型を挙げておきました。いろいろ問題になるところだと思いますが、第1のグループとして、日本型、韓国型、台湾型を挙げておきました。これは日本と日本が植民地化を強行することによって、それぞれの国民国家形成に強い刻印を押しつけた諸国です。

文明、文化、国民、民族、これらは欧米の文明／文化概念、国民国家概念を受け入れる時、日本で漢語を使って翻訳された言葉ですが、これが中国も含めて漢字圏に逆輸入されていく。もともと中国には民族という言葉はなかったわけで、民と族という二つの言葉を合わせて民族という言葉が日本で造られる。それが中国からの留学生その他によって、中国に逆に入っていく、中国の民族的な自覚を促し、民族運動を形成していく。そういう歴史的過程があります。

中国の場合は、そういう言葉を受け入れながら、日本とはかなり異なった展開をしていく。大崎先生が「中華民族と愛国主義」というテーマで話されましたが、香港返還を見てもそうですが、中国にはさまざまな民族がある。それを中華民族という、おそらく民族の定義を越える大きな枠で囲んでいく。したがってそこからはみ出す少数民族が出てくる。それをまとめるための愛国心キャンペーンをする。精神文明キャンペーンや愛国的な文化論争が今、行われているわけです。そういう形で、独自の国民国家形成が行われている。

ベトナムも、先日古田先生のドイモイのお話がありましたが、ベトナムも元は漢字圏であった。近代的な国家のさまざまな基本的な概念は漢字を通じて入ってくる。最初に国民国家を典型的な形で作った日本の概念が漢字として漢字圏に逆に入っていて、ベトナムでもそうであったと。ところが、ドイモイは漢字の概念から全く縁が切れたところで作られた、まさに刷新ですが、ドイモイを通して社会主義の普遍的な国家から、それとは異なる地域国家の概念が出てきて、いろいろ議論しだすと大変ですが、非常に変わりつつあるというお話でした。「地域国家」というのは非常に興味深い概念だと思います。

それぞれの国で民族、国民文化というもの、ネーション概念をどういうふうに入れて形成していくか。国民文化をどういうふうに作りだすか。そこが焦点になっているように思います。日本とともにアジアで植民地化をまねがれたほとんど唯一の国として、また明治維新に類似した近代化をとった国として注目されるタイでは、国民を表すチャートという独自の言葉があり、民族・宗教（仏教）・国王の三位一体が機能していることを、村嶋先生からうかがいました。マレーシアについては野村先生、イン

ドネシアについては山下先生のお話をうかがいました。マレーシアのプミトラとかインドネシアのスク・バンサとか、マレーシアの場合も、マレー人という一つの国民を作り上げていく。そのことはマレー人には含まれないノン・プミトラというものを逆に作りだしていく。同じようなことがインドネシアにもあるわけですね。インドネシアの場合は大変強力な広大な規模で国民文化形成がされている。国民文化は一応地方文化を集めるけれども、しかし、地方のさまざまな文化の中で頂点にあるものを国民文化と称する。頂点とは何か。それは国民的なハイカルチャーであり、国民文化は地方の農民たちの生活や都市の下層民の生活とは切り離された形で形成される可能性が大きい。

シンガポール型にかんしては田中先生のお話をうかがいました。アジアの場合を考える時に中心となる都市は港市ですが、シンガポールの場合は、マレーシアからはじき出されるような形で、華人を中心とした都市国家が作られました。華人でありながら国語は英語というねじれた関係にある。フィリピン型があります。前回のお話で面白かったのは、7000の島々で、4つの解放ということを清水先生がおっしゃいました。スペインの支配、それに対してアメリカが解放する、また日本が解放する、またアメリカが解放する。その前にも中国文明が来ているし、イスラム文明が来る。土着的な文化というものが洗い流されてしまう中で、しかし、ある種の空虚な中で新しいポストモダン的な感性、エネルギーが渦巻いているという、そういうタイプの国民国家です。

小島ミニ国家という類型も考えられます。小さい島が独立したパラオ、ミクロネシアのミニ国家でどういうふうにして国民国家が形成されるか、これも興味深い問題です。島民の多くの部分が移住して送金するミラブ経済。外国の援助に頼る。ある種の官僚制だけではできてミニ国家が形成される。広大なインドについては秋にまたまとめて連続講座を開きたいと思いますのでここでは省略します。

さまざまなタイプの国民国家が東南アジアにはある。それぞれが独自なつくり方をされる。独自なものを持って、それが強調されるが、しかし、国民国家としてのある種の普遍性を備えながら国民国家の持っている共通のさまざまな問題に直面している状況があると思います。

(3) 国民国家の枠を越えるもの

今度は普遍性ではなく、多様性の方ですが、国民国家の枠を越えるもの、ヨーロッパ的な考え方、日本的な考え方で国民国家を考えていくと、そういう概念から外れる

議論を並べてみました。華人ネットワークが考えられる。今日は小木先生がいらっしますのでコメントをいただきたいのですが、資料に、去年お話ししていただきました田中恭子先生の「華人と中国、正しい認識を」（「朝日新聞」1997年6月9日）を入れておきました。華人の8割は東南アジアに住んで、居住国の国籍を持っている。それが香港の場合も問題ですが、出身の中国とのつながりを強めていくか、別の形をとるか、そのことが東南アジアの経済を支配している大きな問題で、それぞれの国が華人問題を持っているわけです。大中華圏という言葉が使われている。華人はそれぞれ居住国の国民である。多様な生き方、生活の仕方をしている。華人ネットワークといっても個々人の結びつきに注目するのが本質的だろうと。東南アジアの華人が「大中華圏」に含まれる可能性はない、と田中さんは書いているが、以前の発言とこの記事とはちょっとニュアンスが違っているような気がします。

あるいは、ベトナムの時にみられたような「地域国家」。ASEANに入りましたけれども、東南アジア諸国連合がどういう形を取るかということもありますが、それ以前に、それぞれの地域、それぞれの都市が他の地域や都市とのさまざまな関係の中で、ある種の調和性を持って展開していく、国境を越えた関係が導かれるのではないかと。弘末先生からは島嶼部における港市とエスニシティの流動的な関係についてのお話がありました。

移民国家として、東南アジア型とオーストラリア型が考えられるのではないのでしょうか。オーストラリアという一つの広大な地域に、どんどん人が入ってきて、多文化主義が問題になるような形になるか。そうではなくて、東南アジアの他の国々は自分のところからもどんどん出ていく。よそからも入ってくる。そういう人々が交流し、移動していく形での移民国家があつて、これも国民国家の既成の概念を越える形を暗示しているのではないかと思います。出稼ぎ国家、フィリピンの場合のように、あるいはミラブ経済と呼ばれているような小さな島のミニ国家のタイプもあるわけです。ある意味では、近代の資本主義と国民国家群の中で追い詰められた小国ですが、逆にもっと自由に島民はどんどん外へ出ていって生活をし、また帰ってもくる。いろんな枠を越える現象が観察されたのではないかと思います。

Ⅲ. 構造化された差別のシステムとしてのアジア

残り時間が少なくなったので、あとは駆け足でまとめなければなりません。これまでのアジアの概念ですと、アジアの全体が比較的均質的なもので、列強によって搾取

される全体としての一地域という認識があったと思いますが、そうでなくて、アジアは多くの部分に分けられるし、それぞれの部分が世界システムの中の一部として機能している。一例をあげればフィリピンの女性の出稼ぎ労働者が、日本に行く、台湾に行く、香港に行く、中東に行く。そこでは国家間の格差が構造化されてあって、その構造の中をフィリピンの女性は移動している。タイの女性にはまた別のルートがあり、バングラデシュの男性労働者の行き先はそうしたルートとからみあいながらまた別の道筋を通っている。そうした様々なルートをたどることによって、差別のシステムとしてのアジアの複雑な関係が浮かびあがってくると思います。

レジュメに「旧植民地につながる白い道」とあるのは、徐京植さんの本から引用ですが、徐さんがヨーロッパを旅行していて、スペインとフランスの国境で止められた。税関を通れない。なぜか。そこでも在日という問題があるわけです。そこからイメージは広がっていくわけですが、世界にさまざまな通路が通じて一見自由に通れる道、ネットワークができていようであるが、その道は旧植民地の人と中核の国々の人では違う意味を持っている。同じ一つの道が周辺の国からは利益を、富を吸い上げる、搾取をする道である。中核の人たちはその道を自由に動く。しかし、旧植民地の住民たちは富を搾取されながらも、しかし自分たちがその道を通ろうとするとストップを食う。不法移民になるわけです。「旧植民地につながる白い道」は世界システムの差別の構造を描き出している言葉ですが、アジアの中にもやはりそういうものができているのではないか。アジアは決して一つではない、差別の構造が機能している構造があるのではないか、ということをお願いして引用させていただきました。

そういう構造の中に日本の役割というものをに入れて観察した時に、われわれはどう考えたらいいのか。戦争責任と戦後責任の問題がこういうコンテキストのなかからあらためて問われなければならないだろう。先程の絵の「ボンオドリ」の中でマレーシア在住の日本人が楽しげに踊っている。その背後に旧日本軍兵士の亡霊が描かれている。はじめに地図でお見せしたような日本帝国の版図がありますが、今、われわれがアジアを問題にする時に、誇張された言い方かもしれませんが、新しい帝国主義、形を変えた植民地主義の存在があるのではないか。われわれはそういうことにもう少し敏感であった方がいいのではないのでしょうか。

そこで、こうしたコンテキストの中では意地の悪い言い方ですが、われわれの大学は、立命館のアジア太平洋大学はそういうコンテキストの中で、何を主張しているのか。何をしようとしているのか。今日はアジア太平洋大学のカリキュラム形成に苦勞されている中島さんがいらっしゃるので、率直なお話をききたいと思います。

Ⅳ. おわりに

レジュメの最後に、「多文化主義・多言語主義のモデルとしてのアジア」という問題を出しておきました。この問題を出したのはわれわれの研究所で最近、『多文化主義・多言語主義の現在』（人文書院）という本をまとめましたが、そこでは主としてカナダとオーストラリアが扱われているからです。多様なアジアは、「東南アジア1997」の絵のところで言いますと、「移民シリーズ」とか「私の部屋」などにも出てきますが、そこにはわれわれが日本で考えているアイデンティティとは違う形のアイデンティティの形成がある。国境を越えて移動する複合的アイデンティティとでも呼びたいようなものです。国境を越えて移動していく、交流し、変容していくタイプのアイデンティティ。9回の講座を通じて、複合社会、複合民族、複合的アイデンティティという言葉が出てきましたが、一つの可能性として深めていくことができるのではないかと。

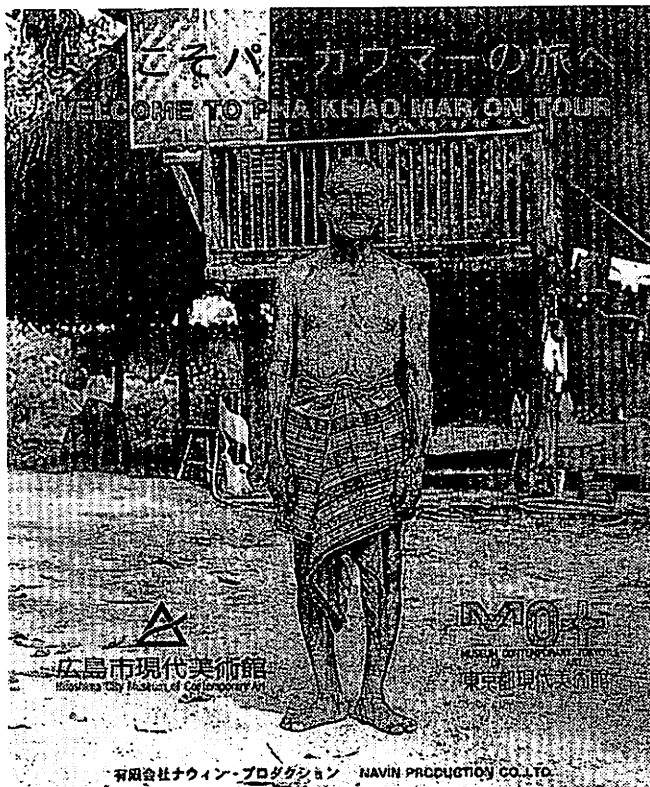
いろんな文明がそこを通りすぎ、あるいは定着していく。そのことが東南アジアのエスニシティを活性化し、多様化する。もともと多様なエスニシティがあって、それが征服によって、国民統合によって潰されていくのではなく、さまざまな征服や国民統合が逆にエスニシティを、多様なものを生み出し活性化している。それは一面では支配に対する抵抗であるわけですが、その抵抗を通じてまた別の新しい多様性が作られていく。両面から見ていった方がいいのではないかと感じました。

この連続講座を通じて、「抑圧と差別のネットワークの中で息づく未来の可能性」とでも言えそうなテーマが浮かび上がってきたように思います。いろんな国や地域の話を聴いていて、さまざまな抑圧、それが一つは国民国家の形をとって現れる。資本主義の形をとって現れる。しかし、そういう中で、ある種のエネルギー、豊かさが作られてもいる。フィリピンの例では極端な形としてお話がありましたが、そういうものとして見ていくことができるのではないかと。皆様のご意見をいろいろかがたいと思います。

最後に、カタログの第1部「文化の交差点から」に収められている、有限会社ナウイン・プロダクションの「パーカウマーの旅」[39-1]が回っていると思います。この展覧会に行った時にこのパーカウマーを渡されました。さっき竹内先生に腰巻きの巻き方を教えてもらったのですが、毛布代わりにもするようです。私はこの布をもって大変うれしかったのですが、会場では若い人たちがその場でスカーフの代わり

にしたり、それをかけて寝ころがってビデオを見ていたりしていました。

カタログには、これは一種の贈与である。贈与に3つの義務がある。贈る義務と受け取る義務と返礼する義務がある、と書かれています。そういう形で渡された日本の人が自由に、いろんなところで使ってほしい、というメッセージがありました。私も今日はあのおじいさんのような腰巻き姿で出席しようかと思ったのですが、残念ながらそういう雰囲気でもないようです。贈る義務、受け取る義務、返礼する義務はまだ考えていませんが、今日の報告を返礼の一つと考えていただきたいと思います。これで私の話を終わります。



[39-1] パーカウマーの旅